

議員定数及び議員報酬調査特別委員会 摘 録

1. 開催日 令和5年8月31日(水) 第3委員会室
2. 出席委員 政野太委員長 桂藤和夫副委員長 堀井秀昭 福山権二 藤木百合子 國利知史
松本みのり 林高正議長
3. 欠席委員 なし
4. 事務局職員 山根啓荘議会事務局長 横山和昭議会事務局議事調査係長 橋本和憲議会事務局主任主事
5. 説明員 なし
6. 委員外議員 坂本義明副議長
7. 傍聴者 1名
8. 会議に付した事件
 - 1 付託事項の審査
 - 2 今後の審査について
 - 3 その他

午後1時30分 開 議

○政野太委員長 それでは、第14回議員定数及び議員報酬調査特別委員会を開会します。出席委員は7名、全員おそろいですので、直ちに協議に入りたいと思います。

1 付託事項の審査

○政野太委員長 それでは、前回の会議で皆様方に御案内をしておりましたとおり、1点目、市民アンケートの検証と評価を行います。特に今回は、市民アンケートの中でも議員定数に関する項目について進めていきます。よろしいですか。それでは、まず1点目。問6、議員は本会議や委員会への出席のほかに、下記のような活動を行っています。あなたが知っていた、または議員が実際に活動している状況を見たことがある議員活動の種類をお答えくださいという項目について、市民の方の回答をもとに皆様方の御意見を聞かせてください。いかがですか。自由に、思ったこと、感じたことを発言してください。複数回答してもらっているので、市民の方が思っておられることがかなり回答にあらわれているのではないかと思います。これに関して何か思われることはありませんか。福山委員。

○福山権二委員 問6のその他の中身は何だったか。

○政野太委員長 その他の項目に括弧書きで、地域要望等の調査、調査研究、まちづくり活動、市関係課との協議などというのが含まれています。消防議員などの議会選出の公務としての業務を見られている方は非常にコアではないかと思いますが、消防団の方が見られた事が回答になっているのかもしれない。何か思うことはないでしょうか。続けていって、全部をまとめてもいいですが、どうしますか。ここだけに絞って意見を求めていくのもなかなか難しいのではないかと思います。次の、問7も議員定数に関連してくるかと思えます。あなたの意見や市民の声は、市議会に反映されていると思いますかについては、③あまり反映されていないというのが一番多い回答になっています。しかし、

次に来るのが、ある程度反映をされている。だから、数字は多少違いますが、2つの意見が同じようにあるということではあります。福山委員。

○福山権二委員 問7の市議会に反映されていると思いますかというのは聞きたいことなのだが、よく反映されている、あるいは、反映されていない、少し難しい。反映されているという基準がそれぞれ市民で違うので、議員がよく言うことを聞いてくれるということなのか、議会に持って帰って議論してもらってもだめだと言っているのか。あまり反映されていないが223人。これを頼むとか、何とかしてくれと言ったが議員が聞く耳を持たないのか、議会に持って帰ったが回答がないと言っているのか。全く反映されていないというのは、何もしていないではないかという意見に見える。問そのものが、判断が難しい感じがする。結果として、あまり反映されていない、全く反映されていない。どういう人がこんなことを言うのかなと思って。関心を持って、議会に対して一定の接触を図ったり、見解を議員に言うのだけれども、どうなのか。市民と語る会とかをしてきて。

○政野太委員長 議長。

○林高正議長 あまり反映されていないというのは、極端な話、議会に興味もないということだろうと思う。議員にこれを頼んだけれども、いいことにならなかったというのはほんの一握りの話で、ほとんど議員に接触などないわけだから、自分が考えていることと議会というのがマッチしないというか、わからないと捉えたほうがいいのではないかと思います。

○政野太委員長 先ほど言いましたが、505人の回答の中で一番多いものが、反映されていないというところではありますが、次に多い、ある程度反映されているという評価を市民の方からもらっているということにもなるのではないかと思います。全く反映されていないとよく反映されているは両極端なので、そこは、あまり議論は必要ないのかなと思いますが、いかがですか。議長。

○林高正議長 問6で一番多かったのが、地域の行事。そういったことで、中には、議員が出てこないとか、自由記述にいろいろなことが書かれていたけれども、接触する機会がないことでこういう結果になるのではないのかなという気がします。

○政野太委員長 坂本副議長。

○坂本義明副議長 議員と市民というのは、比較的、顔を合わせてものを言う人もいるし、3万なにがしのうちには、全くその接点がない人もおられるわけです。だから、接点があって、話をしながら、これをしてとか、このことで困っているという話については我々も片づけているけれども、その話がない人とは全く面識がない。今回も、あちらこちらで話をしてみると、誰々は知っているが、誰々は知らないとか、郡部の議員の名前は聞いたことはあるが顔は知らないということがあった。だから、今回、井戸端スタイルをすることによって、もっと皆さんに顔を見て覚えてもらう、考え方を認知してもらうというか、そういうふうに進めていくことが、今後の、こういう問題についての解決の1つの方法ではないかなと思います。それ以外とすれば、議会だよりで、一般質問をしている人の名前くらいしか知っておられない。一般質問をしていると言え、よく仕事をしていると。それは違うと思うのだが、そういう感覚でおられる。だから、今のところ、議員がなるべく外に出て、行事をのぞくような方法しかないので、これは、ある意味で的を射ているし、ある意味で全く違う方向の結果が出ている気がする。

○政野太委員長 いかがですか。この2つの設問を見て。松本委員。

○松本みのり委員 問6で一番回答が多かったのが、地域の行事で議員を見かけるという話でしたが、

議員からすると、地域の行事やお祭りとかに出るのが本当の仕事ではないという思いなので、そのほかの見えない活動をどう知ってもらおうのかということと、議員の取説ではないですが、議員に日常的に相談とかをされる方はされるけれども、しない方は全くしないし接点もないというのが多いと思います。そこを、いかに敷居を下げてというか、誰もが、思いを持ったときに声をかけて、相談してもらえるような環境をつくっていききたいと、これを見て思ったところです。あとは、問7、あなたの意見や市民の声は、市議会に反映されていると思いますかの問いに対して、505人中の33%、3人に1人の方が、ある程度反映されているというのは、私はすごく大きな数字だと思いました。

○政野太委員長　いろいろと御意見をもらっていますが、ほかにもあれば、いかがですか。今までの意見を少しまとめるとするならば、この設問に対する回答は、我々、議会の思いともあまりかけ離れてはいないというものになりますが、どうですか。福山委員。

○福山権二委員　委員長が言ったことの意味は、議長が言ったように、これを見ても明らかに議会に対する関心が低いと。例えば、市議会議員選挙の投票率があちらこちらで低くなっていて、3割だ、4割だ、5割だ。約半分以上の人が投票に行かないという現実があって、議員選挙でも投票率が低いというのは、ほとんど関心がないというか、投票に行く行為そのものに価値がない。大綱的に見て。そういう市民がたくさんいる。それは議会の責任でもある。そういう中で、行事のときに見るから幾らかは知っている、とは言うけれども、ほとんど、解決をするようには動いてない、議員を使った経験もないというふうに読むべきだと、議会に対して関心がない人が圧倒的に多いのだと。これを見て、その原因がどこかは別にして、非常に関心がない。使おうと思う人は使って、その成果を獲得しているということはあるだろう、というふうに見えるということですか。

○政野太委員長　関心がないということに関しては、1,400人の方に対してアンケートを配布して、回答してもらったのが505人。大体のアンケートに対する回答率、どんなアンケートでも回答率が3割を超える。今回は36.07%ですが、これについて、関心が低いという判断はできないと思います。普通のアンケートの回答率からすると。その中で、505人にこれだけ回答してもらっているということは、議会に対して関心がないということではないのではないかと思います。その中でさらに、ある程度反映されている、されていないというところで多少分かれています。議長が言われた部分でいうと、反映されていないというのがどこを基準に言うのか、というのが非常に難しい質問だった。先ほど福山委員も言われました。だから、我々が評価していることと、ここで市民の方に評価してもらっていることというのは、あまりかけ離れてはいないのかなという思いでお伝えしました。議長。

○林高正議長　昨日、アンケートの自由記述を全部読み直してみたが、年代によって、すごく感覚が違うのですね。18歳以上の人たち、30代くらいまでの意見は、直球というか、何をしているのかわからないとか、議員は少ないほうがいいのか、端的に思われたことをそのまま記述されていて、年齢が高くなってくると、自分たちの提言みたいなものも出てくるのです。ですから、これをひとくくりで考えるというのなかなか難しいのかなと思います。興味を示すのではなく、自分たちが言ったところで通用しないではないか、というような考えもあるのかもしれない。自分も、ブログに結果についてのコメントを少し書きました。繰り返しになるけれども、年齢が高くなればなるほど、庄原市の将来、議会はどうかあるべきかという提言が多かったなと思いました。ですから、今これを分析しているけれども、二極化しているのは、そこに1つ原因があるのかなという気がします。

○政野太委員長　では、次の、問8も議員定数に関連すると思われるので進みます。あなたは、議員や

市議会に何を期待しますかという問いに対して、②地域の声を聞いてほしいという答えが一番多い。さらに、ほぼ同数とあっていいと思いますが、2番目に多いのが、市や市民の利益になるように政策の提言を行ってほしい、あるいは、市民生活で困っていることについて聞いてほしいということで、これを見ても、回答してもらった505人の方については、議会に対して期待を寄せているということが読み取れるのではないかと私は思います。いかがですか。ちなみに、この問8には自由記述欄もありまして、続けて、この下にも、年代別にいろいろな意見を書いてもらっています。これについても、あわせて御意見をもらえればと思います。議長には既に言ってもらいましたが。國利委員、いかがですか。問6、7、8を合わせて、全体的に。

○國利知史委員 問8に関して言えば、①②③に関して期待していると見てとれるかどうかという、どうなのですかね。これは、例えば、全く期待していないという方でも、期待はしてないが、こういうことをしてくれという、深く考えればそういうこともあるのかなと思います。うまく言えないですが。純粋に期待しているから①②③を選んでいるということではないのかなとも考えたりもします。

○政野太委員長 私の考え方は、例えば、ここに、20歳の方が何も期待していないと書いていますが、本当に期待していなかったら何も書きませんよね。書きますか。何も期待していないという回答すらしない。私なら、そうするのかなと。そこに対して、変な言い方ですが、何も期待していないという期待をしてもらっているというふうに捉えることができるのかなと思いました。その中で、この①②③の回答をしてもらっているということは、いい結果かなと思うのですが、どうですか、藤木委員。

○藤木百合子委員 なかなか判断が難しいですが、アンケートに答えるということ自体、ある程度、議会に関して思いを持っているということをきちんと表明されているのだと思います。アンケートをとって市民の声を聞いて、政策の提言をしていくのが私たちの役割だと思います。それに関して、少ない、多いと評価するのはなかなか難しいことですが、皆さんが議員に期待をされているというふうに思います。

○政野太委員長 堀井委員、いかがですか。何か御意見はありませんか。

○堀井秀昭委員 特にない。藤木委員の言われたことに尽きるので。そういう面から見れば、問7の②③が半数以上、市民の期待はある、見捨てられてはいないと思うくらいで、ほかには特にありません。

○政野太委員長 主にこの3点が議員定数に。もちろん、議員定数は何を基準にという問いもありますが、これについては、以前、皆様方で1つずつ整理、精査、審議をしたので、きょうは意見を省きます。だから、主に問6、7、8、あるいは自由記述欄、市議会に対して何か御意見がありますかという欄で非常に多く御意見をもらっています。これらについて御意見をください。問6、7、8について、もし違えば御指摘をしてもらいたいのですが、この評価については、先ほど皆様方から、堀井委員からもあったとおり、市民から全く期待されていないということではないと、ある程度期待を持って、議員にこういう活動をしてほしいという要望があるということでもまとめて評価をしていきたいと思いますが、よろしいですか。福山委員、よろしいですか。桂藤副委員長、よろしいですか。副議長、よろしいですか。後は、自由記述欄のところについて目を通してもらって、何か気になる点があればつけ加えてください。非常に多く書いてもらっています。この、多く書いてあるということが、本当に期待があると。例えば、悪口もあると思いますが、それすらも私には期待に見えてしまいます。もちろん、反省点も含めて。中には非常に心温まるメッセージもあるかと思いますが。これを総じて、どうですか。先ほど林議長からあったように、年代別にいろいろあると思いますが。これも、皆さんに

結構書いてもらったなと思います。藤木委員。

○藤木百合子委員　話がずれたらごめんなさい。年代別で、若い人の回答が少なかったというところですごく思うのが、この前から広報のこととかがあるではないですか。主権者教育というか、若い人が政治とか議会に関心を持ってもらうというか、そういう働きかけに力を入れていかなければいけないのではないのかなと。若い人の回答率が低いというか、関心を示さないというところは、庄原市の将来に対してすごく問題だと思います。人生経験を積んでくれば、長く生きて、長く庄原市に住んでいろいろ思うことがあるので、意見もいっぱい書けると思います。私たちは、今後、若い人の意識というところを考えていかなければいけないなと思いました。

○政野太委員長　藤木委員からも御意見をもらいました。最終的に、この評価の中の1つに入れるべきことかと思いますが、いかがですか。報酬のときには、もう1回このアンケートに戻るのですが、自由記述欄を見ると、報酬を減らせというのはいくらも見えないですね。見えましたか。ふやせというのは結構よく見るのですが。人数も雑に書いている。人数が多くないかとかいうのはありますが、根拠にたどり着くものではないというふうに読み取れると思います。議長。

○林高正議長　何遍も繰り返しになるけれども、市民の皆さんは議会や議員に興味がない。だから、興味がないから、本当を言えば何をしているのかも興味がない。だから、議員など要らないという書き方をするのだと思うが、広報広聴がすごく薄いのだと思います。先ほど藤木委員が主権者教育と言ったけれども、義務教育段階では、小学校、中学校は、ふるさとがいい、地元がいいという教育を徹底的にするのです。ところが、高等学校になってきたらそういう教育はしなくなる。それで、知らないうちに忘れてしまう。だから、この前の大津市議会の前局長のお話で、13歳からアンケートをとったりしていましたよね。だから、こういうアンケートを見たら、そういう取り組みというのをしていかなければいけないなど。何遍試してみても、見たことがない、聞いたことがない人が多いのです。チラシでも、同じものを10回うっても、そんなチラシは見たことがないという人がほとんどなのです。だから、我々とすれば、絶えずそれをしていかなければいけない。そこではないかなと思う。別に、報酬を幾らもらっているか、どんなところでどんな働きをしているかというの、興味がある人は興味があるだろうが、興味がない人は本当に興味がない。皆さんも、議員ではなかったときのことを考えたら、多分そうではないかなと思います。

○政野太委員長　そのほかに御意見がなければ。総じてまとめるとするならば、若い方への議会のPRが必要であるということが、このアンケートの項目から読み取れるということもつけ加えていきたいと思いますが、よろしいですか。関心を高めていくということが重要であるという評価になると思います。ユーチューブを見ていても、再生回数が非常に多い議会というのは、すごくバトルをしていますよね。もう、それをしてもいいのではないのでしょうか。議員同士というのはあまりありませんが、市長と議会が。余談でした。それでは、きょうの議員定数に関するアンケート評価については、この程度でまとめていきたいと思っています。よろしいですか。では、報酬についても最終的にこのアンケートの評価をしていきたいと思っていますので、次の委員会までには目を通してください。それでは、きょうは、私が議員定数に関するまとめを考える中で、どうしても皆様方に協議してもらいたいことがもう1つあります。皆様方のタブレットの資料1を開いてください。ここをもう少し詳しくしていかないといけないかなと思います。それで、何人かの委員の方にはお話をしたのですが、これまでの皆様方の意見をまとめていくと、大幅な減というのは恐らくないと思います。もちろん、増も今のと

ころ意見が出ていない。ただ、会議の適正人数7プラスマイナス1を基準に考えるという常任委員会の構成ですが、ここについて、もう少し皆さんの意見をもらっておきたいと思い、急遽、議題に上げました。この内容について、要は、具体的な常任委員会の人数。今は、条例の中で、総務常任委員会が6人、教育民生常任委員会が6人、企画建設常任委員会が7人と定められています。ここが、本当に今の人数のままが妥当なのかどうかという点について御意見がもらいたいです。最終的にはまだもっと先なので、きょう答えを急ぐものではありません。私からも1つ言いますと、実は、3年前に条例変更があったこともあり、監査委員が企画建設常任委員会から出るという根拠がなくなっています。私が平成25年に議員になったときに、先輩議員に、なぜ企画建設常任委員会だけ7人なのかと聞いたら、そこから監査委員が出るから、決算審査に監査委員は入れないので、そこは7人になっているのだと。ただ、3年前の条例改正によって、監査委員は、そのまま予算決算常任委員会の審議、決議にも入れるようになっていました。そこに根拠が見当たらなくなって、総務常任委員会も6人、教育民生常任委員会も6人であれば、企画建設常任委員会も6人でいいのではないかという疑念が湧いてきたものですから、皆さんの意見を確認したいと思います。御意見をください。福山委員。

○福山権二委員　　そういう疑念を持たれることは、全く意味がないのではないかと。その疑念そのものに意味がないのではないかと思います。なぜかと言えば、委員長が言ったように、単純に6人でできることなら、全部6人でいいのではないかと。この問題に入る進路をそこに持ってくると、要は、6人だっただけではないかと。

○政野太委員長　　これは確認をしておかないといけないのですが、この委員会で1年間、皆様に意見を積み重ねてもらいました。そこで出した答えが、3常任委員会とするということ、それから、会議は7プラスマイナス1を基準に考えるべきだということなのです。だから、6人と7人の差を明確にしないと市民の方に説明をするのが難しいなと思って、まとめるときに悩んだので、皆様方に、7人の根拠があれば意見をもらいたいなというのが私の入射角度です。だから、そこに明確な理由があれば、それを今度まとめに書いていけば。福山委員。

○福山権二委員　　前後するかもしれないが、議員定数を25から20にする、大幅なダウン、激変を決めたわけですが。いろいろな思いがあってそうしたのだが、背景について、5人減らすのだから、当然、予算的には余るし、議員に対する報酬も削減されるので、5人分を20人に、次に議員になった人に配分すれば報酬もふえるという思いもあった。それは、いろいろと意見があって、これだけ報酬が少なかったら、生活設計もできない、難しいのではないかという思いもあった。ただ、今の状況で報酬アップはできないだろうと。そのことを根拠にした議員定数減という主張はなくなったのです。ではどうするのかということで、これからは人数が減るだろうけれども、議会として、庄原市議会の権能をより強化するためには、厳しい環境であるが、最低20人、思い切って25人から5人減らす。その中で頑張ろうというのが基本で、その分、委員会を強化しよう。25人であれ30人であれ、委員会を強化するというのは、庄原市議会として一番あるべき姿。したがって、委員会を強化するためには、3つの委員会にしておこうと。委員会を統合して2つにしようというのではなく、3つにしよう、それで市民の負託に応えよう。それで、20人を3つに分けるとしたら、今でもそうだけれども、企画建設常任委員会が担当する課が一番多い。庄原市の行政として、企画建設常任委員会の仕事が非常に多い。6つの課を担当している。あとは3つとか、4つとか。3つに分けて、7人のところは仕事が多いところ。そこから監査委員を出すということを整合性とその根拠としたという話でした。そうする

と、25人から20人に激減させた中で頑張ろうということと、3つの委員会を活性化させようということで、3つで、6人、6人、6人。1人は企画建設常任委員会に配分しようということが大綱的というか、根拠になって今も続いている。そういうふうには、議会も市民に対する説明をしていけば、何ら説明になっていないということはないと思います。それが、6人、6人、7人にした理由だということ。

○政野太委員長 7人になったのは、企画建設常任委員会の事業数が多いからということでしたか。監査委員と両方ですね。企画建設常任委員会の事業数が多いという根拠がありましたか。横山係長。

○横山和昭議会事務局議事調査係長 分科会になりますが、審査する課、局数で言えば、一番数は多いと思います。

○政野太委員長 現在は、ですね。私のイメージだと、議員になったばかりのころには、総務常任委員会はたくさんあった。所管替えがあつて、それから企画建設常任委員会が多くなったというイメージがありました。

○福山権二委員 昔は、総務常任委員会が多くていけないということではなかったと思う。

○政野太委員長 いや、一番長かった。

○福山権二委員 各常任委員会で議論をどれだけ深めるかということはあるが。

○政野太委員長 堀井委員。

○堀井秀昭委員 執行者側が部長制をとるときに、ある程度、所管課の振り分けをして今の状況になっている。13年前には、所管課の数を考慮されたとはあまり考えにくい。一番考慮されたのは、監査委員をどうするかという中で、当時は審査に入れないという状況があつたので、企画建設常任委員会に1人置いて、企画建設常任委員会から監査委員を出そうという申し合わせでそうなったと考えるのが妥当ではないですかね。

○政野太委員長 福山委員。

○福山権二委員 企画建設常任委員会が7人になった根拠は何だったか。

○堀井秀昭委員 例えば、企画建設常任委員会ではなくてもよかった。どこでもよかったが、その時点では、企画建設常任委員会を7人にして、企画建設常任委員会から監査委員を出そうという申し合わせを行ったということだろう。総務常任委員会でも、教育民生常任委員会でもよかったのだろう。

○福山権二委員 企画建設常任委員会を1人ふやしておこうということになった根拠は何だったか。

○政野太委員長 直近で聞いた話によると、総務常任委員会は予算に直接、非常に大きな影響があるから、総務常任委員会から監査委員を出すのは妥当ではないだろうと。ただ、教育民生常任委員会と企画建設常任委員会がどちらかになったという理由は聞いたことがないです。総務常任委員会はやめようという話は聞いております。福山委員。

○福山権二委員 委員会が、6人、6人、6人で公平だと議決したら、余るのではないか、余ったのをどこで引き取ってもらうのかという話になってくる。

○政野太委員長 今の考え方だとそうになってしまいます。だから、何らかの理由、7人であるべき必要性。議長。

○林高正議長 20人にしておかないと、議長を除いた採決のときに同数になる。そのことがあつて、20人は守らなければいけないという議論が当時あつた。それで、最初からあそこは7人にしようという議論だったと思います。削減していく中で、削減したくない人たちもたくさんいるから、心情的には、

とにかくもう20人でこらえてくれと。多分、そこで、収れんして落ちついた。そういう記憶が私はあります。

○政野太委員長　　摘録を拝見しても、前回の特別委員会でも本当に多くの意見が出されていて、前に進んでは戻りの繰り返しをしています。最終的に、当時は減らすのが議会改革の1つだという流れがある中で、5人という大きな決断をしたのだと思います。ただ、今回の特別委員会と少し違う点は、それをさらに精査しようというのが今回の委員会だと私は感じております。だから、先ほど言ったように、7人である根拠、20人である根拠。確かに、議長が言われたとおり、多数決をとったときの、そういう考え方もあるでしょう。ただ、それも理論づけることはなかなか難しいです。その前の議会は25人であったということもありますし、ほかの自治体で19人になっている、15人になっている自治体もありますので、今回、そこまでそこにこだわることはできないのではないのかなと思います。それよりも、何よりも、20人でなければならない絶対的な理由、それから、企画建設常任委員会が絶対に7人でなければいけない理由がほしいのです。議長。

○林高正議長　　3年前に条例改正で審査に入ってもいいということになったのは、はっきり言って、私は知らなかったけれども、先ほど福山委員が言ったように、当時であれば、ずっとそういう形でできていたわけです。それを明文化したわけでも何でもなかった。ずっと慣例的にできていた。それで、ここでもし1人だけ減にして6人にする。結論を出してはいけなくても、これだけエネルギーをかけてする中で1人減というのは、どうにも理解できないというのが正直な感想です。

○政野太委員長　　理解できないというのは皆さん議員でそれぞれあると思います。ただ、市民の方にこれから説明をしなければなりません。それに対する根拠が必要だと申し上げています。福山委員。

○福山権二委員　　そこに話を据えると、25人を20人にした根拠、あるいは、これから減らすにしても、ふやすにしても、その根拠を公式としてきちんと説明できないと、発想として、できないということになりますよね。そのときに、最低限、本当は、7人、8人議員がいてもいいが、委員長を除いたら5人でしている。多数決で言うと、3対2で物が決まるわけです。これ以上は、ということがあって、できればもっとふやしたい、ふやしたほうがいいと思うけれども、前の、6人、7人、8人の時にはもっと活発に議論があったが、6人にして、20人にして、議員が出てないところがいっぱいあって、そういう中でしているわけです。だから、今の20人で責任を持つという意識、その意識が議会にあれば、1人を減らすどうのこうので悩むことはないような気がする。当時は、最低20人は必要という議論があったと思います。何かを積み上げて20人ということよりも。それは両方あったのだろうが。

○政野太委員長　　改めて確認します。私自身、6人、6人、6人ではないといけないという意見を言っているわけではありません。そこだけ御理解ください。その上で、この委員会の1年間の意見のまとめをする中で、まずは、3常任委員会には絶対ないといけないということが皆さんの共通認識だと思います。その会議の構成については、7プラスマイナス1を基準に考えるというのが、前回の特別委員会でも出されたとおりに、これも踏襲しようと、それで6人。6人はいいのです。ただ、先ほど言ったように、監査委員が条例改正となった以降の7人の理由が必要なのではないかと。20人を先に立ててしまうと、余りの1人を市民の方に説明しないといけなくなります。林議長。

○林高正議長　　そこまで言うのかな。人数の関係で、6人、6人、7人になったと。それだけでも私は別に違和感はありません。当時もそういう議論があっただけだと思いが、そういう議論が全くなかったし、先ほどから福山委員もずっと言っているが、監査委員は外れなくてはならないとい

う状況だから当然にそうただけです。実はきのう、会派で集まって話をしたけれども、1人の議員が16人くらいにしてどうのこうのという話をしたが、そんなことにはならないと。私が、そうするならもう通年議会の話をするしか手がないと言って、ではいいですということできまりをつけたということがありました。だから、6人、6人、6人という議論は、私には理解できません。

○政野太委員長 明確な理由がつけばそれでもいいと思います。ただ、これまで積み上げてきた会議の中でいうところの、議会運営というものを考えたときに、議会運営を考えて議員定数を決めるというのが大前提だと思います。選挙のことで何でもない、議会運営です。議会運営をするに当たって、今の3常任委員会の構成、あるいは、議長、副議長だったり、監査だったり、議会の構成から考えたときの最小人数。最大人数というのは私もわかりませんが、最少人数は、6人、6人、6人と議長というのが最小だと思います。これ以上減らすとなると、委員会構成を変えなければいけません。これまでの会議で積み上げてきた7プラスマイナス1を大前提とするならば、委員会構成自体を変えなければいけない。議会運営をしていくに当たって、最小構成は、6人、6人、6人ではないですかということを申し上げています。その辺についてはどうですか。何かもっと違う意見があればありがたいです。國利委員。

○國利知史委員 委員会の議論、委員会を中心に考えていこうということで、会議の適正人数は7プラスマイナス1ということに記載しているし、それを思うと、会議のベストな人数というのは、8人だと思います。多いほうでいろいろな意見が出て、議論を活発化できるベストは8人だと思います。今のパターンで言うと、企画建設常任委員会がマイナス1人で、ベストから1人少ない。総務設常任委員会と教育民生設常任委員会は2人も少ない。ベストで言うと、です。ベストの人数から1人少ない、2人少ないのを加味して、議長を除く議員数が奇数でないといけないということもないと思いますが、議長を除く議員は奇数がいいということであれば、20人という数字に落ち着く。だから、今、ベストよりも2人少ない委員会が2個あると考えれば、20人がベストではないのかなと私は考えました。

○政野太委員長 全てを理解するのは少し難しかったのですが、まず、8人であるという大前提、根拠。これもさまざまです。確か、前回の特別委員会で、福山委員が8人を提唱されています。それを、前回の特別委員会では、6人だと。ほかの議員の7プラスマイナス1という意見から、6人、6人、7人としている。それで、私が調べたものでいうと、7人の会議ルールという、8人になると10%会議の能力が落ちる説もあります。だから、私は、8人に対しての根拠が全部は理解できないというのが事実です。7人から1人ふえるたびに10%ずつ会議の能力が落ちていく説もあるということです。そこら辺は、個人で見解が違うので。

○國利知史委員 7人がベストということですよ。ということは、現時点でベストな人数よりも1人少ない人数でしているということではないですか。だから、そこも加味して、今言うように、議長を除く議員が奇数ということであれば、トータルの人数は20人で落ち着くのではないかなと。

○政野太委員長 先ほど議長が言われた奇数については、最初に言ったと思うのですが、根拠が乏しいのです。なぜかという、その前の庄原市議会は25人、ほかの自治体でも19人、15人でしている自治体もある。そこは少し弱いかんと思っています。あとは、ベストが7人であるならば、もしその意見を通すのであれば、私なら、7人、7人、7人、21プラス1人で22人に議員を増員しよう。それもありません。議論の中ではありだと思います。これは、ゆっくりと意見を交わしたほうがいいと思います。福山委員。

○福山権二委員 議員定数を考えるときに、委員会の力を強調するというのは思っている。ずっと委員会で議論してきた中で、6人と7人、6人と8人、特に6人と8人では、人数が減るごとに、能力ではないけれども、委員会の議論の中身、質と量が減少するのをひしひしと感じる。8人のときを経験していて、6人になった。非常に多角的に議論をするのが、6つぐらいしていたのが3つになっている。要するに、非常に議論の幅が狭くなって、議論の中で面白くないということも感じてきた。最適は8人だが、今のところ、一般的に減らせというのが強いので、防波堤として20人は必要という判断でいいと思う。

○政野太委員長 議長。

○林高正議長 今回の福山委員の意見が当時の意見だと思う。今、いろいろなことを常任委員会の話で出てきているが、その当時、みんなこのくらいのところで落ちついてくれということだったと思う。だから、積み上げていって、なぜ6人、6人、6人にならずに6人、6人、7人になったのかと言われても、当時の監査委員の形から考えたらそういう形だったし、はなから20人というようなところもかなり決まってきたから、最後はみんなそこでまとめようということだと思う。よその議会でも、極端な話、常任委員会制をとっているけれども、この人数で、これでしょうという、これほどの議論をしているところはないと思う。だから、あなたたちはこの程度のことで議員定数を決めていたのかと言われたら、この程度のことで決まった。

○政野太委員長 福山委員。

○福山権二委員 経過はそうだが、議員定数を決めるとき、25から20にするときも、5人減らして、本当に議会としての権能を果たせるのかと。25という議員定数があるが、十分だと、十分過ぎるほどいるから、減らしたからといって質は変わらないという自信があるのかと。この議会として、25人でその権能を十分果たせたのかということまで議論したのです。その領域に持っていくと、とてもではないが、まとまりがつかなかった。要するに、個人的な議論になったり、25人から20人になったときには議員のレベルを高めないといけないではないかということまで行って、非常に議論が止まった。だから、議長が言ったように、明確な規定、幾らに決めてもいいが、最大26人でしなさいと法律的に決まっている。あとは自由に決めてもいいというのだから、10人にしてもいいし、5人にしてもいいのだけれども、そのときに、減らしながらどう維持するかということで、これがもうリミットだと。議長が言ったように、それで頑張ってみようと思った。今、それを変えるときに、1人減らしても十分だとみんなが思っていたら、その意見が多かったら、1人も減らしてもいいとなれば、無駄ということになる。今のところ、議員定数を1減らすというのを、監査委員の配置がどうのこうで決めるのは難しいと思う。

○政野太委員長 堀井委員。

○堀井秀昭委員 前日も特別委員会を設置して検討されたのだと思うが、残念ながら私はいなかった。議員定数の問題を、特別委員会を設置して検討しようということになった根拠は何だったのか。

○政野太委員長 当時議員だった3人の方がおられますので、もしおわかりの方がいれば、議長。

○林高正議長 議会の活性化ということからスタートしたのです。それで、特例で、33人でスタートして、26人を25人にしたのかな。それで、その当時、旧町から出てきた皆さんと議会の進め方に相当な違いがありました。だから、旧町の方は、議会が始まったら、会議をしているときに目の前の市長といろいろなことをしたり、市と旧町で少し違っていたりして、議会運営も行ったり来たりというこ

とが、はっきり言って結構ありました。その中で、議会改革をして新しい庄原市議会を立ち上げていこうではないかということから、その当時、議長諮問だったかで特別委員会を立ち上げて、議員定数、議員報酬、政務活動費について、徹底的に議論をしていったということです。旧町の時の議員から、私たちが町のとくにもらっていた報酬に比べてすごく報酬が上がったのだから、報酬を上げるというのはどういうことなのかという意見も相当もらったのです。議員定数の話でも、ふやすというか、今でも減っているのだから、これ以上減らすということは何かとか、そういった、本当にコンセンサスが得られないような中でスタートしていったのです。だから、先ほども言ったけれども、20人を死守しないといけない人たちが出てきた。方便でつくったわけではないけれども、監査委員の関係があったから、それを入れて20人で決着したということです。ですから、一番正面の1番地は、議会改革ということです。

○政野太委員長 堀井委員。

○堀井秀昭委員 今の議長の発言には、さまざまところで矛盾がある。活性化というところで、今議員をしている皆さんは、議員の削減によって議会の活力を失われるという感覚の御意見が多い。議会を活性化しようという発想の中で、5人もの削減をしたというのは1つ矛盾があると思う。だから、特別委員会の設置は、削減をすることを目的に設置したのか、それとも、ただ検討をするための特別委員会だったのか、どちらか。

○政野太委員長 議長。

○林高正議長 人数を減らしたことによって議会としての権能が落ちたのではないかとと言われるが、そうではなく、その当時、私は、議員の資質を高めていく中で、20人というか、そこらでできるのではないかということを使ったわけです。それで、全員が恐らく、一番最初のときに、議員定数、議員報酬にしても、減らすという前提で考えていたと思う。するからには、多分、減らす。というのが、33人が26人、25人になっているのだから、次に会うときには減らす。ただ、減らす幅が、委員会がどうだという理屈は抜きにして、人数で来るわけです。だから、24人でいいのではないか、22人でいいのではないか、18人でいいのではないかという意見がばらばらと出てくるわけです。その中から、本当に議会改革をして、動きやすい議会をつくるのならどうするという話になって、常任委員会を活性化して、議会を活性化しようという方向で議論がずっと行ったわけです。それ以外の、人数がどうのこうのというところは、何にもなかったと思う。だから、紛糾したというのはそこです。委員長は議事録を読まれたと。なぜそんなことになるのか、なぜなのかとなり、言った、言わないという話になってきて、その度にそこで決をとらなければいけなくなった。それからもずっと、何度も繰り返していく中で、これはこうですよと皆さんに御理解をしてもらった中で、最終的に委員長報告をしたということなのです。私は、今もその流れで庄原市議会は進めてきているし、広報広聴を充実させていこうとか、そういう流れに乗って進めているから、自分で言うのはおかしいけれども、間違いはなかったのではないかなと感じております。

○政野太委員長 堀井委員。

○堀井秀昭委員 20人を基本に、議論をまとめていくための根拠が、常任委員会の人数が7プラスマイナス1。そこへ目標を定めた上で20人という数字が出たのかな。

○政野太委員長 議長。

○林高正議長 定めたわけではない。その中で、先ほど言ったような18人とか、22人の議論があった。

みんなでやりとりする中で、議会改革として進めて、適正で委員会の中で活発な意見交換ができるかどうか。6人は少ないという人もいた。8人にしたら逆に発言しない人もいると。だったら6人で行こうということでみんなが納得した。それに監査がプラス1人ついて、7人にした。そういうことです。ですから、最終的には20人で決着をつけたけれども、それは、最後までずっと、はっきり言って、もめました。

○政野太委員長 摘録を見ると、ちょうど同じ時期、実際には9月に入っていました、この時期に、18人から22人という枠に絞って議論を展開していました。でも、最終的には、11月の時点でまだ確定されていませんでした。議員によっては、もう多数決をとって決めると、これ以上議論しても意見は出尽くしたという意見のある中で多数決をとられたと思います。ただ、そのときには、その後、議会報告会が市内7カ所で行われていました。当時は政務活動費のことや議員定数、報酬のことがあった関係もあって、市内7カ所で開催されて、さらに、それが終わった1月末くらいの段階で、人数についてまだ決着がついてない状況でした。だから、私もそれを見て思うのですが、きょう初めて常任委員会の数ということで皆さんに議論してもらっているのですが、今後は、20人なのか、19人なのか、あるいは18人なのかという議論になっていくのではないかなと思います。ただ、私が思ったのは、常任委員会を活性化しようということは皆さん共通の認識となったので、活性化させるためには、一体何人が適正であるかという御意見をもらいたいということで、きょうは進めております。堀井委員。

○堀井秀昭委員 前回、当時の特別委員会の委員長として議長はそんなものはなかったと言われたが、恐らく、合併後の人口の減少という状況は、議員定数を定めていく上で、ある程度大きな要因として特別委員会を設置したというふうに私は理解する。何かの要因がなければ、ただ単に議会の活性化だけで議員定数を一気に5人も縮めることは恐らくできなかったのではないかな。それができたということは、何だったのかというのが一番気になる。皆さん御存じのように、国会議員はもちろん、県会議員もさまざまな区割や議員定数の変更を行ってきている。これは何を根拠にしているかということ、議員定数の変更というのは、人口というか、もう少し縮めれば、有権者数。広島県議会においても、そこら辺をにらみながら変更が行われて、庄原市と比婆郡が1つになって、1人になった。議員定数を考える上での一番大きな根拠は有権者数、人口を基本に、日本の自治体というか、国も県も考えてきたのだろうという思いがいまだに私は抜けない。そのところを考えるならば、そこにあわせて活力のある議会を維持するためには何が必要か、どうすればいいのかということを加えて考えていく必要があるのではなかなか定めにくいですが、基本は、類似団体の状況にある程度合わせることで市民の理解が一番得やすいように私は思う。22人か、20人か、19人か、18人かわからないが。

○政野太委員長 福山委員。

○福山権二委員 例えば、人口というのは1つの大きな要素だとは思いますが、5億円の問題も、敗因も含めて、人口ですということでは本当はいいのかと。面積もあるのではないかと。地方が抱える問題もあるので。それだけに頼るのはどうかという意見も一方ではあるというのは間違いない。県議会も、広島市議会はあれだけ議員がいて、県議会もいて、あれだけ県議会議員がいるのは無駄ではないかと。実際には広島市議会議員が仕事をしているわけで。それよりも、庄原を2人、三次を2人にふやしたほうが。広い面積で、人口をふやそうというときに、なぜ広島市には人口が多だけで県議会議員も市会議員もダブって莫大いて。県議会議員が仕事をしていないではないかという声もある。私ではない

が。そうすると、堀井議員のように、議員定数は人口が基本だというのはある程度大きなポイントだが、そこに立脚すると、本当の意味で有権者の負託にこたえ切れるのか。やる気があるかないかだと言われたらそうなのだが。私は前回のときにも言ったのだが、確かに人口だ。そうすると、総領が1,325人とすれば、総領から議員が出せるようにしようと思ったら、1,325人で1人保障したらいいのではないかと。当時の人口で計算したら、25人になるのです。それなら25人を変える必要はないのではないかという議論もした。その議論に対しても、当時、非常に多角的な議論があったのです。結果的には、今、総領から出ていないですね。本町も出ないのだから。人口だけだと言いながらも、そのことを非常に危惧するので、これ以上減らせないという気持ちは、私はあったのです。だから、正論だけれども、議員として、議席において、議会として当局のチェック、監視をしてさらに提言をするので、果たして多角的な議論ができるかと言えば、最低20人はいないとできないという思いがあって、反対だったが、仕方なかった。それで折り合いをつけようと。合併をすれば、そう言って減らそうというのが世の中の流行りだったから。合併で議員年金も吹っ飛んでしまうくらい議員が減った。合併して庄原市みたいに大きくなると大ごと。西東京市みたいに2キロ、5キロでするわけではない。そういう意味では、幾らかそういうことも言いながら、面積も加味して、責任を持てると言えば20人だということを決めて、そこで全体が合意したわけです。その合意したことを大事にしようということで、今日まで進めてきた。

○政野太委員長 堀井委員。

○堀井秀昭委員 今の福山議員の持論から言えば、庄原市は、人口が何人になろうとも議員定数20は守るのだというふうに聞こえる。それはない。だから、何を基本に議員定数を変えてきたか、ふやしてきたか、減らしてきたか。その基本的なものは何なのかというのは、この特別委員会が設置されたわけだから、市民が思っている最大の要因を無視してはいけない。それは考えないといけない。

○政野太委員長 福山委員。

○福山権二委員 堀井委員が言うと言得力があるように聞こえるし、議論としては成り立つと思うが、例えば、西城地域であれだけ人数が減ったら、うちのところでは2人でいいとか、1人でいいという意見になるのかどうか。

○政野太委員長 堀井委員。

○堀井秀昭委員 その議論はおかしい。小選挙区制をとってないのに。庄原市内全域を1選挙区として皆さんが立候補して選挙をしている。西城が何人、総領が何人、比和が何人、口和が何人、それは、全般的な議論。西城からばかり15人出てもいい。

○政野太委員長 堀井委員は人口を検討するときからずっとこの意見を言われていますが、私はこう捉えています。確かに、人口を起点に考えたときには、堀井委員が言われるとおりですが、この会議ではそれ以外の議論を重ねてきました。財政の面から、あるいは、歳出規模の面から。その結果、今、3常任で7プラスマイナス1という結果が生まれてきています。人口が減っているのだから議員を減らすのだということについては、理解はできますが、この会議の中で積み上げてきたものからという、また逆戻りになってしまう議論になると思います。だから、人口で行くということについては、最終的に、今度、市民の方の意見を聞かないといけないので、どちらにしても、またそこに戻ってくると思います。人口については、それでよろしいですか。議長。

○林高正議長 アンケートを読み直して思うけれども、何遍も言うが、市民は議会と議員に対して関心

がない。だから、我々が何をしているのかを知らしめるというか、一緒になって考えていく。それが必要なのだと思う。執行者も、今みたいな市政懇談会をしていたのでは、それこそ、庄原市は何をしているのかという書き方をした人もいるから、一緒にタッグを組んでしなかったら、あれは議会、これは執行者というようなことでは。それこそ、これだけ人口が減ってきている中で、市民はみんな危機感を持っているわけです。それに応える市議会になっていかなければいけないと思います。ですから、そういう意味で、我々は、議論はしたけれども、この人数というか、ベストメンバーで頑張るということを訴えたら、市民の方が、多過ぎると言うことはないのではないかなと個人的には思います。

○政野太委員長 前回の摘録から感じたことが、先ほど議長みずから言われましたけれども、20人にしたという根拠は、最初はなかったのだと思います。全く根拠なしで20人とした。ただ、今、20人で進めています、それは、私はちょうどよかったと思います。なぜかということ、6人という会議のルールが守られている。当時、監査委員がいるから企画建設常任委員会は7人だと。そこは考えていないのに、逆によく20人でまとめたなと思ました。それが非常にうまく回っていた。ただ、最初に申し上げたとおり、3年前の条例改正によって監査役の役割がなくなって、その場合の根拠がどうしても欲しいのです。押し切るというのも大事かもしれませんが、押し切るだけの理由もいまだにないというのが私の今の考えです。要するに、人口減少もある程度加味しなければいけないという思いの中で、議会運営は最小構成ですべきだと思っています。議長。

○林高正議長 委員長がそう言われるのなら、私は前から監査委員は要らないという論者ですから、監査委員をやめてしまえばいい。

○政野太委員長 副議長。

○坂本義明副議長 議選の監査委員をしたことがあるが、議選の監査委員はあまり意味がないと思う。しっかりと監査するのは、それなりの者でなければ。だから、自分のところを監査するのが当たり前かもしれないけれども、研修などで言うのは、県北なら県北の、地域での監査委員だったら本当の監査ができるというような議論もあるし、勉強会でもそういう話です。例えば、三次市の監査を庄原市の者が行ってする、三次市の者が庄原市に来てする、それが本来の監査だと思う。しっかりと監査のことがわかって監査する。失礼なことを言うようだが、そういう人が監査すればまた違うと思うけれども、議選で監査委員になったから監査するというのは違うような気がする。

○政野太委員長 私は今、侮辱をされた気持ちで大変気分が悪くなるのですが、私は、現在、庄原市議選の監査委員です。坂本議員はその2つ前の監査委員です。その前監査委員みずからが、意味がないという発言をされるのはいかかかと思ます。監査委員の議論をする場所ではないので、この議論はやめましょう。よろしいですか。きょう答えを出すわけではないので、皆さんに、20人である理由とか、7人にしたほうがいいのかという理由をもう一度整理してもらって、市民の方に堂々と説明ができるように。最終的には、市民と語る会でも話題になると思ますので、そのときに、もちろん市民の方の感情も入れていかないといけないと思はします。議長。

○林高正議長 10年間滞りなく行ってきて、きちんと機能して、向上してきているのだから、私はもういじる理由がない。

○政野太委員長 だから、今後、20人なのか、19人とは私は言っていないませんが、常任委員会を6人、6人、6人にとすると、常任と議長1人で19人。20人と19人という検討をする幅があるのかなと思ます。國利委員が言われたものであれば22人を検討しないといけなくなります。堀井委員。

○堀井秀昭委員 要は、地方自治体としての庄原市の行政の監査、予算執行の監視、政策の提言。市民の代弁者としての議員の責務を果たしていくのに、議会を運営していく上で、庄原市議会は、議長を除く19人がベストと定めた。19人が18人になっても、この辺の数字が、行政を監視する上でベストな人数であるということを引きちんと打ち立てて、市民の皆さんの理解を得ていくということが必要だと思います。その理由を立てるのに、どういったことが必要なのかということは今から検討していかないといけない。市長とちょうちょうはっしですればいいという意見が委員長からも出たが、庄原市の本会議では、確かに、市長や副市長は必要なら1回か2回は答えるけれども、すぐに職員、課長へ向けて振られる。そうすると、議員と課長の議論になる。要は、その課長が市長の決裁を持たないことを言ったりできない状況にある。それでは課長と議員との議論の発展にはつながらない。そこら辺が、議会の運営上、問題点かなという気が最近している。これは議運で考えていくことなのだが。議員定数においては、庄原市議会が、地方自治を監視する議会を、活力を持って円滑に進めていくためにはこの人数は必要だ、というところを引きちんと議理論武装をしていけるなら、それはそれで、その方向でいかざるを得ないというように思います。意見として言うておきます。

○政野太委員長 よろしいですか。今の堀井委員の意見に。福山委員。

○福山権二委員 少々言っても、おまえは黙っておけと言われたことはない。関連だと言って何でも言っているのだけれども、これまでに、そうでない議長もいた。なぜ私が指摘されないといけないのか。そういうところは議長の裁量の問題で、確かに、これまで議長をした人が、減らしてもいいとか、いやこのままでいかないといけないという意見を出されるのは非常に大事だと思う。その前段として、議長として、議員の意見を最大限、本会議でも言わせたという自信があれば、それは言ってもいいが、議長が議員の言うことに規制をかけたり、議長経験者が今の議長と一緒に考えてほしいところがある。市長がきちんと答弁しないと何回も言ったが、本当は、あんなことは議運で決めてから、議長から申し出るべき。大体、説明員で答弁者ではないのだから。説明員は説明をする。根幹のことを言えば、こんなことぐらいは市長が答えなさいと言っても答えないのである。

○政野太委員長 次回の会議は、本会議も始まりますし、改めて御案内するということによろしいですか。それでは、きょうは、この程度で、第14回議員定数及び議員報酬調査特別委員会を閉会します。

午後2時58分 散 会

庄原市議会委員会条例第30条の規定により、ここに署人する。

議員定数及び議員報酬調査特別委員会

委員長